

東大寺南大門仁王像の迎角が有する構造

水野谷 憲郎

(2012年10月5日受理)

要 約

前紀要にて、東大寺南大門仁王像の迎角は確かに存在し、その迎角を想定して当初より造像されていると述べた。しかし、それは実証的根拠に乏しいものであった。この度美術院より「東大寺南大門金剛力士像修理報告資料写真」をお借りすることができた。それらの資料写真が見せる東大寺南大門仁王像の各部位が有する傾斜角を調べた結果、迎角があると結論するとともに前紀要で想定した傾斜角度はさらに急激であり、仁王像は当初より東西に向かいあう立ち位置にあったと判断した。

キーワード 迎角、傾斜角度、比例、視点、最良の拝観位置

1、研究のねらい

筆者は、これまで仏像が有する「迎角」なるものについて調査を進めてきた。その理由は、仏像鑑賞における視点として、「迎角」が有効であると考えたからである。一般的に仏像鑑賞においては、その特異な形姿や宗教的なシンボルとしての説明から入るものが多い。だがそれ故にその目の前にある立体としての造形ではなく図像学的な意味としての視点へ向かいやすくなる。それも一つの視点ではあるが、その一個の造形としての意味ではなく、宗教としての仏像の種類とその役割としての意味を読みとることに終始しやすい。その結果、その持物と象徴する形姿を探して終わるのであれば、その仏像を鑑賞しに行く必要はない。図像の記号を確かめるのだから仏像の種類説明で済む。その仏像という彫刻を見に行く意味はその仏像だからこそ所有している造形的特質、その事実から得られる様々な感覚、そこに呼び起される想像的、創造的知の営みの豊かさにある。その最も中心にあるその物自体の造形が持つ特質を不問にしては、鑑賞の実体験という根拠を失う。即ち、生な実物に触れる豊かさにはいかに出会うことができるかということこそ鑑賞の基本である。写真や絵図は実物とは違う。仏像という対象は、鑑賞者に体験としての実際の立体や材質、色彩を提供し、鑑賞者に新たな世界との出会いという現実を齎すからこそその鑑賞と考える。そこで、このように新たな現実と出会うための方策として、筆者が提案するものが「迎角」である。事前に知識の多

少を問題にせず、対象と鑑賞者である自己との関係性を具体的に意識化していく手立てとして、「迎角」という問いは有効ではないかと考えるのである。「迎角」という問いを獲得していくことによって鑑賞者は、実際に眼前している対象の在り様に伴い生起する変相を見出ししていく。その見え方の違いと鑑賞者の自覚的な立ち位置の問題は、造形の仕組みという構造や作者の表現意図など、対象が有する内的な論理に触れることへと進み、様々な意味性や物語性へと開かれていく。鑑賞はこうした現実とのより深い関わりの中に見出される世界把握の試みでありその可能性を開いていくものである。自分の外世界に目覚めそれを把握し獲得し働きかけて意味あるものに変えようとする行為そのものが生きる営みであるならそのままをその場面ごとに繰り返す行為が鑑賞である。外世界を読み解き想を広げる営みが鑑賞学習となると、欠くことが出来ないことが他者との意見交換である。その共通するテキストであり外世界という対象こそ作品であり、仏像である。仏像の造形という現実を体験しうるための扉を開く問いとなるものが「迎角」となる。

以上の提案の妥当性を検証していくために、「迎角」そのものが実際に存在しているものであることを実証していく必要がある。それがこれまでの本研究である。その結果を見ると、「迎角」が造像において、意図的に試みられてきたものであるという確信を益々深めている。筆者は「迎角」を、5つの様式に分類した。まず「仰ぎ見る高い位置に仏像がある時の様式」がある。その一つが、拝観者に近く立つ像は、はるか頭上にあるのだから前傾し、その二つ目は遠く立つ場合であり、高い台上にあったとしてもそのままの立ち方では視線が拝観者まで届かず前傾したように見えてしまうため後傾させて視線が届くようにするのである。次に「拝観者より背が低く小さな像の場合」がある。この場合どうしても上から覗くため後方に倒さないとお顔も全身も見えない。また「斜めから拝観される像」がある。この場合は斜めから見た時に左右等しく見えるようにつくるものである。そしてもう一つが、「垂直に立ち、人間の背丈を越える像でありながら前傾も後傾もさせない迎角」である。「東大寺南大門仁王像」がその典型である。本研究では、美術院が有する、「東大寺南大門金剛力士像修理報告資料写真」（以下「仁王像資料写真」とする）を検討し、前紀要にて想定した「迎角」という意図の存在を検証することにした。

前紀要では「東大寺南大門仁王像の迎角」について、それは垂直に立ち、頭上はるか上に立つ像でありながら前傾させないで自然に見せるのもであると述べた。即ち、上部を大きくし、下から見上げた時に自然な比例になるようにするとともに各部位の傾斜を下から見上げる拝観者に向けて傾けるという方法である。しかしながら想定に留まらざるを得なかった。こうした傾斜という「迎角」を実証する資料が不十分であったためである。

2 そこで今回は少しでも確かな論拠となる資料として「仁王像資料写真」を美術院より提供していただいた。それを検討し、そこに実際の比例や傾斜を求め、筆者の見出した「迎角」が存在しているか否かを述べていくことにした。

なお、先述したとおり、本研究の先には立体造形作品の鑑賞に寄与していくねらいがある。その意味で、実際に「迎角」を視点として取り入れている実践がある。その様相を取り上げて、そこから生まれる鑑賞学習の可能性にも言及していく。

2、研究方法

研究の方法については、先述の通り「迎角」についての実際の傾斜の在り様を実証していく必要がある。仁王像のフォルムが持つ傾斜と拝観者の位置、距離などが関わる問題である。美術院より借り受けた「仁王像資料写真」を調べることから、実際に仁王像が有する傾斜角やそのフォルムが向かう方向を導き、それが意図的な変形であるのか否かを問うことにする。美術院所蔵の「仁王像資料写真」には仁王像解体修理時の様々な写真がある。それらの側面写真が持つ仁王像の頭頂部の傾斜角度を測定し、調べることにした。写真の中では、頭頂部に最も明瞭な形が現れており、解りやすいと判断した。またこうした角度が意図的に造りだしたものであることをあらためて一般的な人体の形と比較確認することにする。なお、この「迎角」を視点とした仏像鑑賞を実施している中学校があると先述した。その鑑賞の記録を取り上げ、「迎角」という観点と生徒の受け止め方について今後の本研究が取り上げていく課題として言及する。

3、東大寺南大門仁王像が有する各部位の傾斜と「迎角」の在り方

3-1 東大寺南大門仁王像の迎角について前紀要にて想定したこと

東大寺南大門仁王像二体は向かい合って立っており、その背丈は10mにもなるうとしている。しかしながら南大門中央に立てば、見事な姿が立ち現れる。実際の比例や形を見ると、かなり歪み、手は異常に長い顔がやけに大きいと言った不自然さがある。また側面を見ると、太くして安定させるかのようにずんぐりとした形態であり通常目にする颯爽とした姿は見られない。ここに巧みな「迎角」の仕掛けがあると判断した。そこで、「一般的な人の形とはかなり異なり、頭頂部をほぼ45度下方向に傾斜させ、南大門中央を通る拝観者の目に美しいフォルムが結実するようにしている」としたのである。

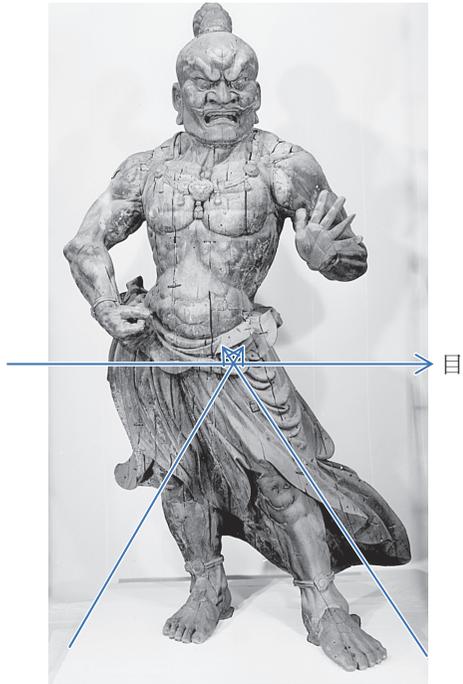
3-2 東大寺南大門金剛力士像大修理資料写真による前紀要にて想定した事項の検証

前述の通り、東大寺南大門金剛力士（仁王）像が、拝観者に向けてよりよいフォルムを形成するために各部位の傾斜角を意図的に一定方向に偏向したり、角度を変えたりしているかどうか問題である。角度を見るにあたり、頭頂部の傾斜は頭部のフォルムが向かう方向を如実に表すところでもある。そこで頭頂部の傾斜角度について、頭頂最長上部と額上前頭の最も高いところを結ぶラインが床面と作る角度を調べることにした。（このラインと頭頂部位の水平線が作る角度に同じ）。頭頂部の形はこのラインの内側では見えなくなり、外側は見えるのである。

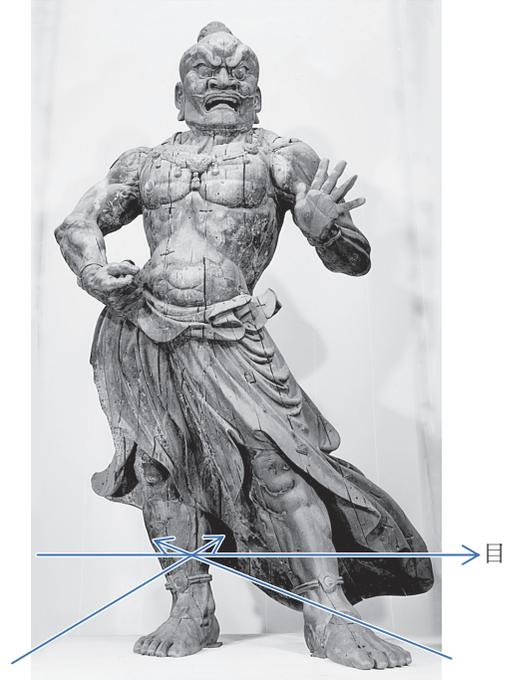
最初に阿形像から見ていく。1 図は896cm（台座60cm）の像のおなかあたりにカメラを設置し、正対した形で撮影したものである。2 図は人の目の高さである160cmほどの高さから撮影したものである。実際に拝観者はこの高さあたりから巨大な仁王像を見るのだからこちらが常態として見知っている形である。1 図を見ると拝観者が下から見上げた時に自然な

比例となるように頭部を大きくしたことがよくわかる。2図は普段見ている自然な比例の形である。

3-3 阿形像の迎角



1図 像高中央の高さから撮影



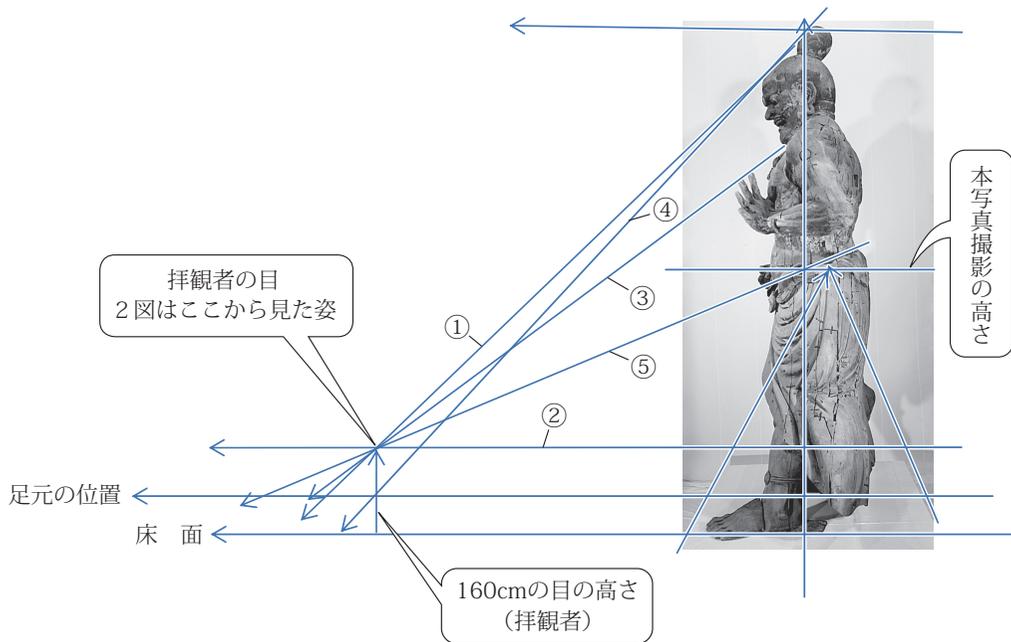
2図 人の目(約160cm)から撮影

さていかがであろう。どちらもさすがに素晴らしい。いや同じものを見ているのだから同じに素晴らしいはずである。だが、明らかにここに並べられた2枚の写真は違う。人の目の高さからの方が颯爽とした躍動感がみなぎっている。この撮影ポイントを割り出してみることとする。このポイントは阿形像の最良の視点でもある。

側面写真3図の中に2図が見える場所を求めることにする。まず2図では、頭頂部にわずかに髻が見えている。従って視線は①の線(頭頂の位置が髻の上から $\frac{1}{3}$ ほど下がったところにあっている。このラインを下すと40度(下から見上げているので実際の傾斜角度はさらに立ち上がる)となる。次に目の高さである②の線(2図で求められた目の高さを3図に当てはめて、主脚である右足の膝下として設定)を水平に引いてみる。その交点(2図を撮影した視点)である。因みにその場所が正しいか、他のポイントを重ねてみる。2図では前に突き出して広げた左手の人さし指の上が左肩の少し下がったところにあっている。そこで3図の左肩少し下がったところと人さし指の最長上部を結んだ③の線を引いてみる。すると見事に①と②の交点に重なる。さらに念のため、もう一箇所確かめてみる。腰衣がおな

4

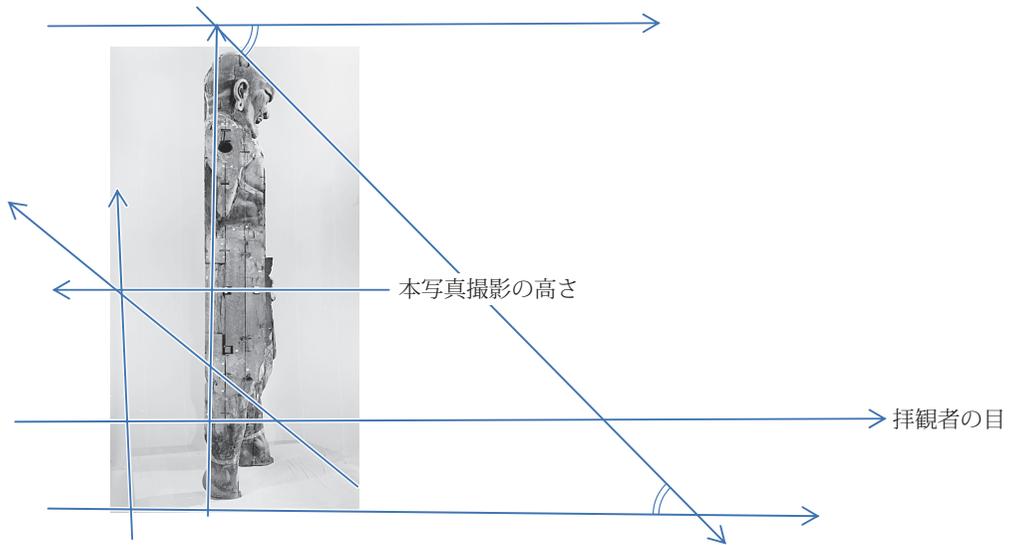
かのわきでまくれて翻る場所がある。2図では向かって右腹脇にほぼ水平に近く翻っている。3図でその場所を見るとおなかの脇に斜め前に下がる形で写っている。この斜め前に下がる傾斜が視線の方向とかなり近いため前から見ると水平に近くなるのである。そこで3図のおなか脇にある衣のまくれの傾斜に合わせて、⑤の線をひいてみる。するとこちらも見事に①と②の線の交点に重なる。当然であるがここが撮影ポイントである。そしてこの位置は髻と頭頂部分をつなぐ傾斜のライン④の線（傾斜角45度である。①の線同様実際はさらに立ち上がる）の外である。④の線の位置は髻が見えなくなる境目、即ち④のラインの外に立てばより良い仁王像と出会えることになる。それが①と②の交点である。2図はここから撮影したものであり、このあたりを通る拝観者を想定してこの像は造られていたと考える。一方④の線より内側に入ると髻が見えなくなる。拝観者が頭頂の奥行きを見ることが出来るのはこのラインの外側であり、このラインが制作者の意識した基準であったと考える。即ち45度のラインだが実際はもう少し立ち上がる。他の写真で確かめていきたい。



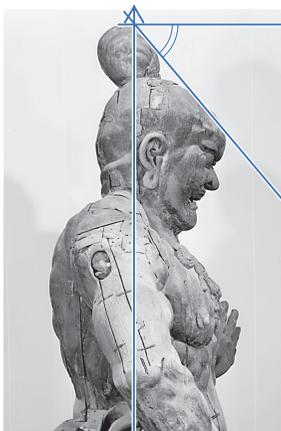
3図 仁王像阿形のおなかの高さから撮影されている写真

4図は像高の丁度中央の高さ、即ち上下の比例が実際の比例に近く見える場所からの写真である。そして本像の中心に位置する柱材である。

この柱材の上部に頭部が作られている。ここに見られる頭頂部の傾斜は、本像を肉付けしていくうえでの基本的な傾斜となる。2図に写し出されている頭頂と前頭部（額の上）を下から見ることが出来る最接近場所はこの頭頂と額上部をつなぐライン先にある。この部位の傾斜角度を見るとほぼ45度。



4図 45度



5図 49度

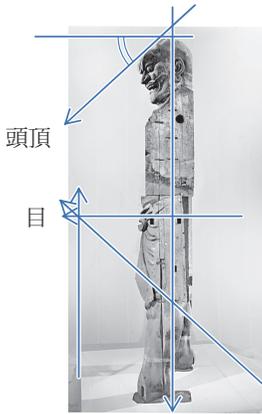


6図 50度

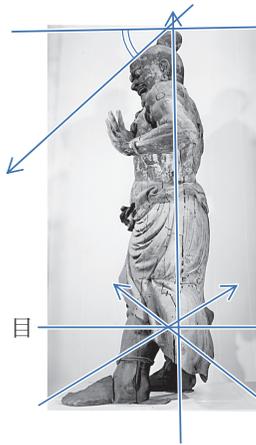
5図と6図は、髻がついた状態の写真であり、3図4図よりさらに高い位置から撮影したものである。即ち実際の比例や形態に近いものである。この髻と頭部が見せる傾斜角度を測ると共に約50度ある。しかしこの位置でも頭頂部はまだ上方であり実際の5図6図は50度以上とみてよい。従って3図と4図の実際の角度は50度以上となる。3図と4図が45度あり、その実際は50度以上となると目の高さから撮った写真は5度以上加える必要があるということである。他の写真を見る時の考慮事項である。

7図は、髻がない中心の材である。ほぼ頭頂部の傾斜は40度。頭頂が奥に回り込む関係で実際はもっと急激になる。実際は50度以上と見る。8図を見ると、写真が拝観者の視点に近い高さから撮影している。この時の頭頂部の傾斜は43度。撮影した視点が低い分傾斜が

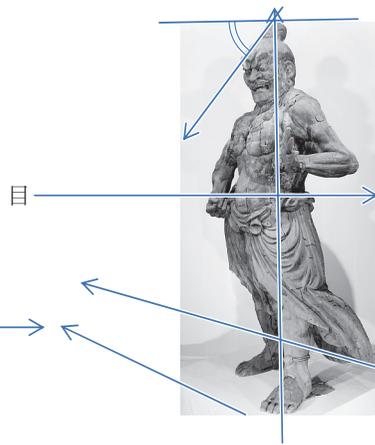
6



7図 頭頂40度



8図 頭頂43度



9図 頭頂52度

緩くなっている。8図に修正角度5度以上加えると48度以上となる。5図と6図で確かめた50度以上に近い。9図は、像の中央の高さから撮影したものである。像の上下の比例は実際の寸法に近い。この写真を見ると、頭部がかなり大きい。4頭身半程である。この頭部の髻と頭頂部の塊の正中線にその傾斜を求めるとおよそ52度ある。これらのことから実際には52度前後の傾斜があると見た。このことは前紀要で大雑把に像の最頂上部から45度の傾斜ラインを引いた外側に最良の拝観位置を定めていると想定したが、その位置について修正する必要がある。即ち、前回述べた位置よりさらに像に近い位置からも頭頂の髻を仰ぎ見ることが出来るとともに比例も美しい姿に出会えるということである。これで筆者の疑問も氷解した。実は像の頭頂から45度のラインを下すと南大門のほぼ中央石畳の上に来るのだが、実際にはそれより内側に移動した場所からも髻が見えるのである。この造像の秘密は頭頂部位の傾斜角度が45度より急激な52度前後あるということである。その結果、像の髻が見えて比例も美しく見える位置は頭頂部位から52度のラインを下した位置、阿形像の立ち位置から8mほどとなる。南大門の中央柱間を形成する左右の柱より像よりの位置である。

阿形像の資料写真から極めて大胆な傾斜角度と比例によって前紀要の想定を超えた近接位置から見事な姿が見えるように仕組まれていることは明らかとなった。次は吽形像において追認していく。

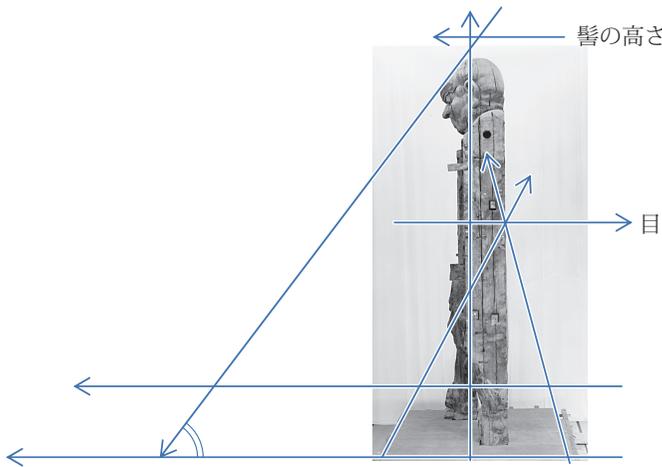
3-4 吽形像の迎角

まず10図を見てみる。頭頂部の傾斜角度は51度。この写真は像の中央部の高さから撮影している。従って実際はさらに急激になるはずである。頭部にはまだ髻は載せられていない。

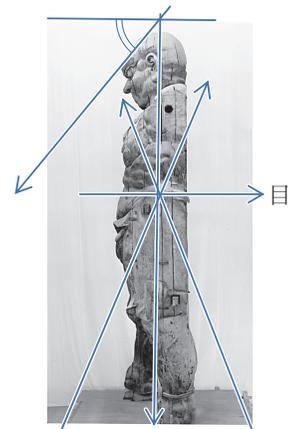
11図を見ると、この写真は像の中央部から撮影したものであり、実際の形姿に近い。その頭頂部の傾斜は50度ある。10図に肉付けが少し増えた状態であり、頭頂の傾斜はほとんど変わっていない。12図は吽形像がより良い比例で見える通常の拝観者の位置から撮影したものである。12図では左肩の頂上部とあごの下のラインがほとんど同じ高さに見えてい

る。また左腰の腰衣がまくれ上がっている頂上とおなかの胸骨下のでっばりの位置が同じである。13図の写真は側面である。12図で見た、こうしたラインを結ぶと拝観者の位置、即ち12図を撮影した場所がわかる。

13図で確かめてみたい。髻がついている。この傾斜角度は52度である。11図の頭頂における傾斜とあまり変わらない。ということは12図の頭頂の傾斜を上方に延長したあたりに髻が作られている。ここからの傾斜が52度である。腰の高さからの撮影であるから実際はさらに角度がつく。13図における髻からの傾斜角度52度に従ってラインを下せば像から8m手前あたりに降りてくることになる。この位置は南大門の中央の通路を形成する二本の柱の像寄りの位置である。



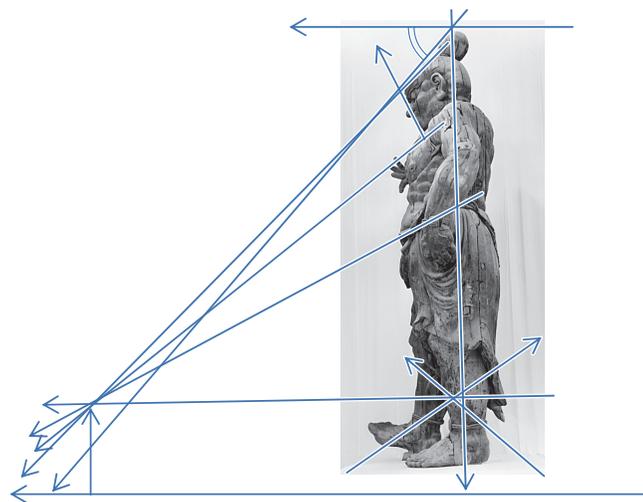
10図 51度



11図 頭頂部51度

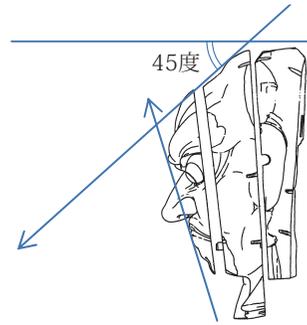


12図

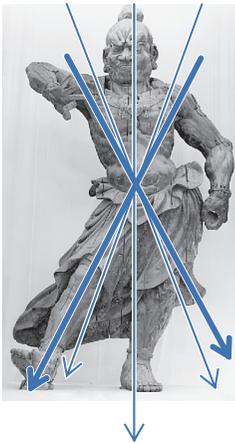


13図 52度

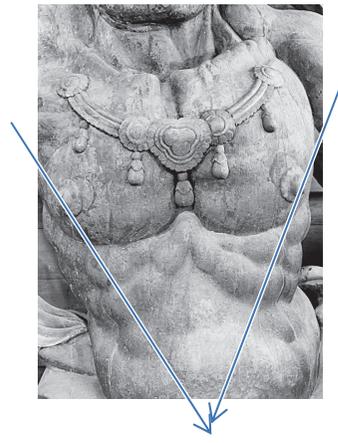
さらにここでもう一つポイントを示したい。阿形像もそうであるが吽形像の顔面の傾斜である。頭頂部位と顔面の傾斜が作る角度が一般的な人の頭部の形ではない。首を引き気味に垂直に立てていながら顔面は傾斜しているのである。その秘密は14図を見れば明らかである。頭部前方部位は楔形の材を合わせて顔が下方に向くようにしているのである。即ち、首を垂直に立てながら下から見たら整ったお顔が見えるように傾けているのである。まさに迎角を意図したフォルムの意図的な下方偏向がなされている。またこの正確に写された側面図の頭頂部傾斜角度はほぼ45度である。ここに髻を付けた傾斜角度はそれ以上となる。この傾斜角度について、これまでのデータを見ると阿形像は52度のあたりにあり、吽形像もほぼ同じである。どちらにしても50度以上の傾斜ラインを降ろすと南大門中央通路を形成する二本の柱から像寄りの位置に到達する。阿形像と吽形像の二体に見守られた最良の拝観位置はこの間の通路となる。



14図 吽形左側面図



15図



16図

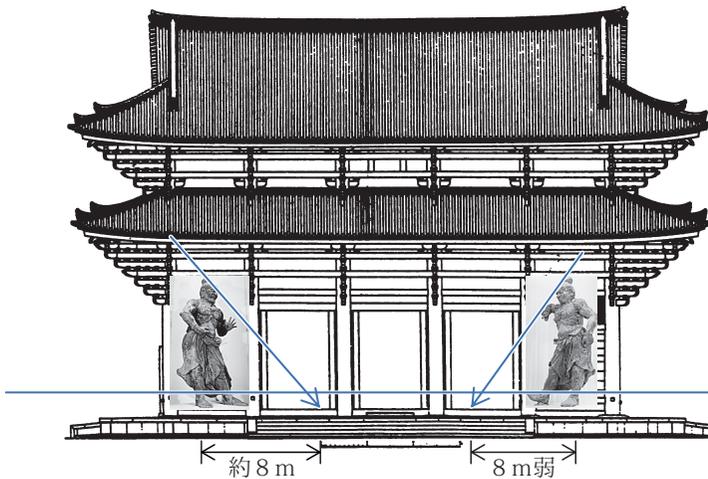
さらに、胸の乳首を最終的に修正した跡がある。16図阿形像を見ると修正前の位置は幅が狭く高い。従って、下向きに幅を広げて直したことになる。これを正面の全身像15図にあてはめると修正の意図は明白である。拝観者の視点という下方からの目に乳首の方向を合わせ、下半身の力の方向をしっかりと受け止めていくためには広げる必要があったのである。この下から拝観する視線に応えるために乳首の方向を下方修正したこと自体が「迎角」を意図的に工夫している事実でもある。

3-5 検証の結果

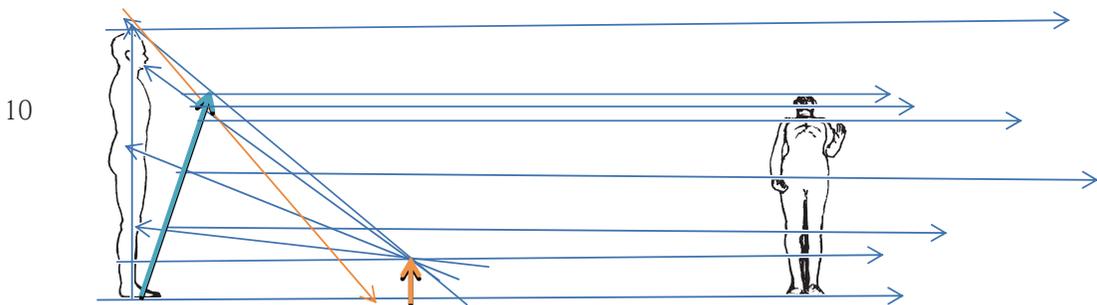
以上、南大門仁王像は通常の人体とは大きくその形態や比例を変え、ゆがめている。阿形像(10図)5頭身にも足りない頭部の大きさも、きわめて極端な顔の傾斜も全て拝観者が限られた南大門の中央通路を通るというポイントに合わせて造像したからである。その造像の位置は当初より明瞭に定められていた。それは中央の基準となる材の形に既に一定の傾斜が作られていることで明らかである。そして、その中心材を挟むように左右から材が合わさるに従いそのそれぞれのフォルムが中心の材に合わせて傾斜や比例を造りだしている。こうして短時間に、優れた立体的躍動感あふれる彫刻が生まれた。その意図された傾斜角度は筆者の予想を超えて厳しいものであった

17図は以上の成果に基づいて写真を南大門に合わせて貼り付けてみたものである。実際は南大門の北側に少し振り向いた立ち方であり、そこは修正してほしい。だが頭頂部の傾斜ラインが降り立つ場所は南大門中央通路の両脇、柱の位置である。この間が最良の拝観位置となる。

因みに、一般的な人間を10mの大きさにしてこの南大門に置き、仁王像同様頭頂から50



17図



18図 一般的な人の形

度のラインを引いた外側に視点を置いて見上げるとどのように見えるであろう。18図の通り、あごの下をみるばかりとなり頭頂部は見えないし目線も合わない。また比例も頭部が小さくなり後方に倒れるかのような見え方になる。従って見上げる巨大さはむしろ強まるが人体が持つ自然なバランスや立ち方の美しさは失われる。怪物映画のような圧倒する巨大さを見せるのであればこの方が効果的である。だが南大門の仁王像はそれを選んではいない。怪獣性よりフォルムの調和を選んでいる。

以上から、阿形像と吽形像はそれぞれ南大門中央通路から拝観すると、最も均整のある力強い美しい立ち姿に出会えるように寄木によって造られている。それは頭頂部の傾斜が激しく傾けられることで明らかである。従って、南大門仁王像は造られた当初より東西に立ち、向かい合い、中央に焦点が集まるように、中央通路からの視点に合わせて造像されている。鈴木嘉吉が「吽形像の胸および腹正面、阿形像の腹正面から、それぞれ像の根幹材などを前後に貫く懸木は、それぞれの先端を各南大門端の間の東西隅柱に組み込まれた貫に懸けて留められているが、このような貫は、柱を立てる前に、像を貫で支えるために予め構架されていたもので、その後の段階では、到底組み込めない」^④として間接的に阿形像と吽形像は当初より向かい合うように計画して造られていたことを示している。筆者も納得するところである。即ち「当初は両像共に南を向いていたが雨風をよけるために南側を板でふさぎ東西向かい合うようにした」という説は取れない。確かに両像の立ち位置や向きを見ると現在は向かい合いながらもやや北側に顔が降られている。このまま南側に向けると両像の顔は左右から中央通路に向けられていく。このことは捨てがたい。しかし決定的に問題であることは、あの側面を晒すことである。仁王像は側面と背面は一般衆生に見せるものではなかったはずである。また顔の傾斜の激しさを見ると、南正面の遠方からの視点には合わない。頭頂部位の傾斜角が50度以上という角度で落とす意味が不明である。遠方から見ればその実際に変形し、ゆがんだもとの姿が立ち現れる。仏師が見せたい形はそこにはない。以上から阿形像も吽形像も南大門中央通路を通る拝観者を当初より想定して作り上げていると結論した。

4、今後の課題

4-1 迎角についての今後の課題

本研究は、立体造形の鑑賞における有力な視点としての提案をするために進めてきたものである。まず立体造形を味わうにはその立体そのものに触れていく手立てが必要であるということから始まった。そして筆者はその立体造形に触れていく有力な手立てとして「迎角」を提案することが必要と考え、そのありようの調査を進めてきたのである。その結果東寺と東大寺の調査では「迎角」なるものが確かに存在することを述べることはできた。その結果、東大寺南大門仁王像はしっかりと一定の傾斜と比例を駆使して南大門中央柱間通路を通る拝観者に向けて「迎角」を形成していると結論した。ただ、まだ東寺講堂四天王像とこの東大寺南大門仁王像の2例にすぎない。さらに仏像や立体造形作品などの調査を重ねていく必要がある。その上で鑑賞活動においていかなる意味合いを有するかについては言及すべきである。

4-2 今後の課題としての「迎角」と鑑賞の在り方

「迎角」の問題は、対象となる仏像の造形的つくりに関わる視点として着目したものである。それは言い換えるならば、立体を味わう上で、立体という空間に作用する実態としてのあらゆる変相へと意識を向けていくために設定する装置である。

「迎角」なるものがどのように仕掛けられているのかと問うことによってその立体的現象のあらゆる変相を興味深い対象として意識に上らせることになる。この装置を意図的に取り入れている中学校の実践が東京学芸大学附属小金井中学校3年修学旅行（2012年5月実施）である。この修学旅行は主に奈良方面を対象とし、仏像や古建築、万葉をその内容としたものである。日程は4日間であり、その中で仏像と視点を合わせて拝観することや、仏像がどこに向かってよりよい姿を見せようとしているかといった問いを提示していくのである。訪問するところは以下の通りである。室生寺、聖林寺、飛鳥巡り、法隆寺、中宮寺、法輪寺、唐招提寺、薬師寺、奈良公園巡り、平等院、広隆寺、天龍寺、東寺などを拝観する。この旅の感想に次のようなものが見られた。

「男子A；僕はいまでも聖林寺の十一面観音菩薩像が印象に残っている。しかし写真を見てもあまり何も感じない。本物を見れば、さまざまな角度から拝観し、作者の一番伝えなかったことが受け取れる。…文化財はその時代によって、人の思いが乗せられ、かたちになって今に残されている。その「かたち」は皆で共有できるものとして作られたものだと思う。」

写真と実物の違い、「かたち」そのものが持つ意味へと言及している。この中学生がまさにそこにある「かたち」に触れ、さらに皆で共有できるものという指摘は「かたち」を通して人は形が投げ与える問いを共有し、コミュニケーションを生み意味を共に造り出す文化の種のようなものとしてみるならまさに鋭く形の意味を開示している。

「女子B；自分が一番印象に残った文化財は、東大寺南大門の金剛力士像で、この像は東大寺の一番はじめに（会おう像として）ふさわしい大きさで、すごい迫力を感じた。3D映像のように飛び出して見えたので、とても驚いた。近くでじっくり見ると、衣が風になびいている感じがとても力強く、けれど細かくて、爪などの細かいところもすごかった。…また京都奈良に行って深めたいと思った。…自分は知識も大事だがそれ以上に本物と触れ合うことが大切だと知ることが出来た。」

立体造形の生な迫力を新鮮に感じ取っている実感が良く伝わってくる。興味関心が一気に広がり、実感するかけがえのなさはあらゆる学びの原点である。

「女子C；今回旅行を終えて一番関心を持った問題は阿修羅像（興福寺）の、なぜ合掌している手がななめになっているのか？というもので、結果参拝している人を考えている。位置が関係している。というものであった。（阿修羅像は興福寺曼荼羅によると中央の釈迦如来像の右上に描かれている。即ち拝観者は阿修羅に向かって右から見ることになる。従って阿修羅の合掌の手が左にずれることで中心があうことになる）昔の人の技術すごいと思った。仏像が美しいと感じるのはそのような工夫があるからであり、なかったら、ここまで感動しなかった。…他の学校の修学旅行を聞くと、学習を一日中するというところはなかった。けれど最終日には本当によかったと思えている。仏像を見るだけではつまらなかっただろう。

何故この仏像はこのようになっているのか、などなぜと自分の予想を繰り返し広げていくことにより、より楽しさを味わうことが出来た。私は何故という疑問を持つ大切さと、すぐ答えを求めるのではなく、自分の考えも持つという大切さを学んだ。… 仏像だけではなく他の場面でも何故？を考えて行きたい。」

この女子生徒は、阿修羅の合掌する手の位置への疑問から「迎角」の与える具体的な問題に触れて、さらに自分が何故という疑問を持って迫ることの大切さという学習の本質の問題に至っている。筆者の意図する鑑賞学習の一つの姿である。この修学旅行が国語科、社会科、美術科、音楽科等の総合的な学習として準備されてきたものであるため、必ずしも「迎角」の指導に特化して語る成果ではないが、少なくともこの修学旅行において、このような鑑賞が展開し深まる姿に「迎角」が大きく関わっていることは確かだ。修学旅行最終日の帰りの列車内で書いた160人の事後感想において、仏像や建築の造形的良さについてはほぼ全員が触れている。それだけ中学生が仏像という対象を通して造形という現実を体験し、そこから学ぶ意味や文化を考える契機を持つに至った様子が伺われる。仏像をどこから排すると目が合うかとか、何故に前に傾いているのかとか、何故手は中心からずれているのか、といった「迎角」からの問いから対象の内実に触れていく姿がここにある。この度貴重な資料を提供していただいた東京学芸大学附属小金井中学校の実践とその指導された大根田友萌先生、そして貴重な東大寺南大門仁王像写真資料を提供して下さった美術院、東大寺に感謝申し上げ本論考を終えることにする。

挿入図資料

- 1 図、2 図、3 図、4 図、5 図、6 図、7 図、8 図、9 図、10 図、11 図、12 図、13 図、15 図、16 図、17 図、18 図
… 東大寺南大門金剛力士立像（仁王像）修理報告写真資料 美術院所蔵より
- 14 図…「東大寺南大門 国宝木造金剛力士立像修理報告書 図面編」文化庁文化財保護部美術工芸課奈良県教育委員会事務局文化財保護課 編集、東大寺発行、平成5年3月発刊より
- 17 図…「東大寺南大門史及び昭和修理要録」所収、実測図版 美術院所蔵より（「仁王像大修理」

引用文献

- ①「仁王像大修理」東大寺南大門仁王尊像保存修理委員会編 朝日新聞社 1997 所収
「七百九十年目の甦り その尊容と平成修理の概要」西川新次著 27頁～28頁より

引用資料

- ② 男子A、女子B、女子C、…東京学芸大学附属小金井中学校3年 修学旅行2012年5月実施
修学旅行学習プリント第5日「最後に…」(指導 大根田友萌教諭)より

13

参考文献

- ③「東大寺南大門国宝木造金剛力士像修理報告書 図版編」文化庁文化財保護部美術工芸課、奈良県教育委員会事務局文化財保護編 東大寺 1993
- ④ 伊藤延男、小林剛著「中世寺院と鎌倉彫刻」/改定版 小学館 1980
- ⑤「仁王像大修理」/東大寺南大門仁王尊像保存修理委員会編 朝日新聞社 1997

- ⑥ 根立研介著「天下復タ彫刻ナシ 運慶」ミネルバ書房 2009
- ⑦ 山本勉著「新出の大日如来像と運慶」『museum 東京国立博物館研究誌 no 589』所収
平成16年4月15日発刊
- ⑧ 山本勉監修「別冊太陽 運慶 時空を超えるかたち」平凡社 2010年12月12日発刊
- ⑨ 西村公朝 熊田由美子著「運慶 仏像 彫刻の革命」とんぼの本 新潮社
- ⑩ 数内佐斗司著「ほとけの履歴書 奈良の仏像と日本のこころ」NHK出版生活人新書
2010年2月10日発刊
- ⑪ 「南都六大寺大観」第9巻 東大寺1、第11巻 東大寺3 岩波書店 1972
前田泰次著「奈良の寺 第14巻 大仏と大仏殿」岩波書店 1947
- ⑫ 山本勉「運慶にであう」小学館 2008
- ⑬ 小林剛著「仏師運慶の研究」奈良国立文化財研究所学報所収 昭和29年
- ⑭ 水野谷憲郎著「日本の美術鑑賞学習メソッド開発研究－仏像鑑賞における『迎角』」2010
- ⑮ 水野谷憲郎著「日本美術鑑賞学習メソッド開発研究Ⅱ－東寺講堂四天王像の迎角の検証」2011
- ⑯ 水野谷憲郎著「東大寺南大門仁王像の迎角－日本美術鑑賞学習メソッド開発研究」2011

筆者加筆

- ⑰（阿修羅像は……）本文12頁 上から32行目～34行目